

# 2次元半無限領域における Rayleigh 波に関する数値計算

愛媛大学大学院理工学研究科 機械数理研究室 白石克郎

## 緒言

一般に地震波などに代表される3次元波動伝播問題は、縦波(P波)、横波(S波)に加え、Rayleigh波と呼ばれる表面波が組み合わさり、複雑な挙動を示すことが知られている。本研究は半無限領域における弾性波動方程式にR波が発生するような境界を与え、数値解析によってR波の伝播の様子を検証することを目的とする。しかし、s、差分化した3次元方程式は数値解析が困難であるため、2次元における次のような方程式を考える。

$$\left\{ \begin{array}{l} \rho \frac{\partial^2 \mathbf{u}}{\partial t^2}(x_1, x_2, t) = (\lambda + \mu) \nabla \nabla \cdot \mathbf{u}(x_1, x_2, t) + \mu \Delta \mathbf{u}(x_1, x_2, t) \quad (-\infty < x_1 < \infty, 0 \leq x_2 < \infty, t > 0) \\ \lambda (\nabla \cdot \mathbf{u}) \delta_{j2} + \mu \left( \frac{\partial u_j}{\partial x_2} + \frac{\partial u_2}{\partial x_j} \right) = 0 \quad (-\infty < x_1 < \infty, t > 0, j = 1, 2) \\ \mathbf{u}(x_1, x_2, 0) = \mathbf{f}_1(x_1, x_2) \quad (-\infty < x_1 < \infty, 0 \leq x_2 < \infty) \\ \frac{\partial \mathbf{u}}{\partial t}(x_1, x_2, 0) = \mathbf{f}_2(x_1, x_2) \quad (-\infty < x_1 < \infty, 0 \leq x_2 < \infty) \end{array} \right. \quad (1)$$

ただし、 $\mathbf{u} = (u_1, u_2)$  は2次元の変位を表し、 $\rho$  は領域の密度、 $\lambda, \mu$  はLameの弾性定数、 $\delta$  はKronecker deltaである。この境界条件はR波が発生するNeumann条件である。Neumann境界以外の境界には波の反射を防ぐため、波が抜ける境界条件を与えた。

## 数学的準備

### フーリエ解析

式(1)を変数分離して得られるHelmholtz方程式の基本解

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{P波入射とその反射波を記述する } \Psi_P(x, k) \\ \text{S波入射とその反射波を記述する } \Psi_S(x, k) \\ \text{R波入射とその反射波を記述する } \Psi_R(x, p) \end{array} \right.$$

を用いて定義される一般化されたFourier変換を、次のように書く。

$$\left\{ \begin{array}{l} F_j \mathbf{f}(k) = \int_{R_+^2} \overline{\Psi_j(x, k)} \cdot \mathbf{f}(x) \rho dx \quad (j = P, S) \\ F_R \mathbf{f}(p) = \int_{R_+^2} \overline{\Psi_R(x, p)} \cdot \mathbf{f}(x) \rho dx \end{array} \right.$$

このとき式(1)の解 $\mathbf{u}(x, t)$ は

$$\sum_{j=P,S} F_j^* \left\{ \cos(C_j |k| t) F_j f_1(x) + \frac{\sin(C_j |k| t)}{C_j |k|} F_j f_2(x) \right\} + F_R^* \left\{ \cos(C_R |p| t) F_R f_1(x) + \frac{\sin(C_R |p| t)}{C_R |p|} F_R f_2(x) \right\}$$

と書けることが知られている。ただし、 $C_P, C_S, C_R$  はそれぞれP波、S波、R波の速さである。これによって $\mathbf{u}(x, t)$  は、P波、S波、そしてR波成分にそれぞれ分解することができる。

## 差分化

波動方程式を中心差分を用いて差分化する。まず、空間  $x_1, x_2$  方向の間隔を  $h_1, h_2$ 、時間  $t$  の間隔を  $s$  とする。次に  $x_1 = x_i = ih_1, x_2 = x_j = jh_2, t = t_k = ks$  として  $\mathbf{u}(x_i, x_j, t_k) = \mathbf{u}_{i,j}^k$  と置き換えると、式 (1) は以下のように差分化できる。

$$\begin{aligned} \mathbf{u}_{i,j}^{k+1} = & 2\mathbf{u}_{i,j}^k - \mathbf{u}_{i,j}^{k-1} + \frac{s^2}{\rho h_1^2} B_{11} (\mathbf{u}_{i+1,j}^k - 2\mathbf{u}_{i,j}^k + \mathbf{u}_{i-1,j}^k) \\ & + \frac{s^2}{4\rho h_1 h_2} B_{12} (\mathbf{u}_{i+1,j+1}^k - \mathbf{u}_{i+1,j-1}^k - \mathbf{u}_{i-1,j+1}^k + \mathbf{u}_{i-1,j-1}^k) \\ & + \frac{s^2}{\rho h_2^2} B_{22} (\mathbf{u}_{i,j+1}^k - 2\mathbf{u}_{i,j}^k + \mathbf{u}_{i,j-1}^k) \end{aligned}$$

ただし、 $B_{11} = \begin{pmatrix} \lambda+2\mu & 0 \\ 0 & \mu \end{pmatrix}$ ,  $B_{12} = \begin{pmatrix} 0 & \lambda+\mu \\ \lambda+\mu & 0 \end{pmatrix}$ ,  $B_{22} = \begin{pmatrix} \mu & 0 \\ 0 & \lambda+2\mu \end{pmatrix}$  であり、 $i, j, k$  の範囲は  $I, J$  を十分大きくとり、それぞれ  $i = 1, 2, \dots, I-1, j = 1, 2, \dots, J-1, k = 0, 1, 2, \dots$  である。

## エネルギー

式 (1) の解に対するエネルギー密度関数  $e(\mathbf{u}(t))$  は、以下の通りである。

$$e(\mathbf{u}(t)) = \frac{1}{\rho} \left\{ \lambda \left( \frac{\partial u_1}{\partial x_1} + \frac{\partial u_2}{\partial x_2} \right)^2 + \mu \left( \frac{\partial u_1}{\partial x_2} + \frac{\partial u_2}{\partial x_1} \right)^2 + 2\mu \left( \frac{\partial u_1}{\partial x_1} \right)^2 + 2\mu \left( \frac{\partial u_2}{\partial x_2} \right)^2 \right\} + \left( \frac{\partial u_1}{\partial t} \right)^2 + \left( \frac{\partial u_2}{\partial t} \right)^2$$

ここで、式 (2.1) の  $e(\mathbf{u}(t))$  を用いてエネルギー密度の領域全体の総和を

$$E(\mathbf{u}(t)) = \int_0^\infty \int_{-\infty}^\infty e(\mathbf{u}(t)) dx_1 dx_2$$

と書くと、 $E(\mathbf{u}(t)) = E(\mathbf{u}(0))$  が成り立つことが知られている。この等式を利用することで、差分化された式 (1.1) が正しく計算されているかどうか確認できる。